

2. 星出 豊先生を囲んで

平成 22 年度の本学オペラ公演、ドニゼッティの《ピーア・デ・トロメイ》は、10 月 9 日（土）・10 日（日）の両日、テアトロ・ジーリオ・ショウワにおいて開催されました。東成学園のオペラ公演は、昭和 32（1957）年の第 1 回から、今回で通算 34 回目となります。星出豊先生は、昭和 57（1982）年の第 10 回公演以降、平成 21 年度の《愛の妙薬》までに合計 14 回もの公演で指揮をされています。その中には、日本初演となった前回、平成 19（2007）年の《ピーア・デ・トロメイ》も含まれています。

今回の公演では、本学出身で星出先生の教え子でもある本学講師、松下京介先生が指揮を担当されました。創設者下八川圭祐先生のオペラに対する熱い思いは、星出先生を通じて、本学オペラ公演に受け継がれています。公演の余韻がまだ残る秋の午後、星出先生を囲んで下八川圭祐先生をしのび、それぞれの学生時代の思い出と夢を語るひと時が実現しました。

日 時：平成 22 年 10 月 14 日（木）16 時 30 分より 18 時

場 所：学長室

同席者：二見修次 木村淳子 黒田 隆 田野崎加代 中村佳子
的場辰朗 山館冬樹 八尋久仁代 酒巻和子

● 下八川圭祐先生の発声指導について

星出： 下八川学長の発声指導は、学生全員に対して行われていました。黒田先生はじめ本学の先生方も、学長先生ご自身によって行われた発声練習をよくご存知でしょう。ただ、それが「ベルカント」というものだったのかどうか、正直言ってよくわかりません。というのも、先生ご自身はドイツ人のゲルハルト・ヒッシュ先生に師事していたのです。でも圭祐先生の周辺には、藤原義江氏などイタリアで勉強した人が多かったので、ご自分の耳で、体験によって独自の発声法を編み出された、ということはできます。「声帯は肉体だ」とおっしゃっていた先生の編み出した発声方法は、下八川先生の発声論以外の何ものでもありません。響きをまとめて、美しい声で歌う。これはベルカント唱法に間違いありません。すなわち国際的な発声を確立されていたのです。周りの歌手の方々はもちろんのこと、イタリアやドイツからいらした指揮者の方々も認めていらっしゃいました。

下八川学長の発声指導は、ご自分で作り上げたテクニックとその発声論を学生に勧め、いわば強引といえるほどに推し進めたものです。学生全員に統一した発声法を指導し、先生方にも指導法を徹底したのです。学生は学校で預かったものであり、自分はその責任者であるから、学生全員を見る、という信念のもと、発声を教えながら自分の教育理念を通されました。後期試験の時に生徒が前期より伸びていないと、必ず先生の名前を尋ねら

れて、担当の先生を替えられました。これには2つの理由があったと思います。ひとつは、先生の指導方法について、学生各個人にあった指導をしてもらいたいという要望であり、もうひとつ大事なことは、学生自身に対して、自分で努力しなければ先生が叱られてしまうという現実を見せることでした。この徹底した教育には、今でも頭が下がります。

木村：私も大学を卒業しましたその年のコンサートで下八川先生に演奏を聴いていただき（確かオペラ《ボエーム》からミミのアリア「私の名はミミ」を歌ったと思います）、声専音楽学校でレッスンとソルフェージュを教えさせていただくことになりました。当然、下八川先生の厳しいレッスンも受けました。その当時は年に4回の試験がありまして、そのたびに自分の生徒が歌う時は周りに聞こえるのではないかと思うほど、動悸が激しくなり、先生から「まあ良いです、素直に歌っています」と言われると、ホッとしてドッと疲れを感じました。

● 下八川先生のオペラに対する情熱と人間教育

星出：先生はとにかくオペラがお好きでした。厚木に短大ができた時、雨もりのするような校舎の広い教室で、本当に雨がもっている、バケツを置きながら発声の授業をされました。私には、「とにかく、オペラを学生にやらせてやってくれ」と言われました。経験させなければわからないのだ、ということです。ステージに上がる、化粧をする、衣装をつける、こういうことでどんなに変身できるか体験させたい、と、常に話しておられました。私も知人から使い古した照明器具などをもらってきて、講堂と称する部屋でオペラの真似事をしました。やはり東京声専音楽学校の先輩で指揮者の杉浦先生が居られて、一緒に随分やらせてもらいました。サークル方式で遅くまで練習していると、学長先生がお菓子などを持っていらして「これが僕のやりたい教育の一環だ」と学生たちと談笑したものです。

私生活にも厳しく、禁酒・禁煙、恋愛禁は有名です。その時間があつたら発声練習をせよ、という独特のお考えでした。恋愛まで禁ずるのはどうか、という声もあったようですが、つまりは、ご自分は遊んで酒を飲んだりしたけれども最終的に学生はそんなことをしてはよくないだろう、というご自分なりの規則でした。私が教えるようになってからは、「自分は高知出身だから、本当は酒が強いんだよ」とおっしゃって時々飲みにつれて行ってくださいました。決して大酒は飲まれませんでした、とても美味しそうに飲んでいらしたのが、印象的です。

また先生は、特に時間にはとても厳しかったと思います。自分に厳しく、人にも厳しかったといった方がよいかもしれません。先生の最後のオペラ出演だったと思いますが、《魔笛》のザラストロをお歌いになられた時でした。昼間の公演なので、朝一に声出しを兼ねて一度歌っておきたいので伴奏に来てほしい、と言われ、朝6時のお約束で10分前にかがいましたら、総て用意されて教室でお待ちになっていたらしいです。ある時、こんなお話をしてくださいました。「自分は代議士に合わねばならないことがあった。代議士は、会議が長引いて約束の時間より20分くらい遅れることもあるかもしれない、と言ったのだ。これは反対に、20分早く終わる可能性もある、未定である、ということだったの

だよ。実際、20 分前に行って待っていると会議がちょうど終わり、結局約束した時間の15分前までの5分間しか会えなかった。時間通りに行っていたら、会うことができなかったのだ。」つまり、時間を守らない人間は、教育者としても失格、人間としても失格、ということをお教えくださったのです。私も今、オーケストラの指導でも授業の時にはベルの鳴る前に行きます。人に教えるということは、約束を守ることから始まる、という下八川先生の教えを実行しているつもりでおります。おかげさまで、学生の態度も変わってきました。遅れる学生もほとんどいなくなり、時刻ちょうどに指揮台に立つと全員起立する、という気持ちの良いスタイルが身につけてきました。教える、教わるというお互いの人間関係、人間性というものも、圭祐先生から教わったものです。人間教育は、学生時代からやらねばならない、私にそういう教育をしてくださったのが東京声専音楽学校でした。東京声専音楽学校が昭和音楽短期大学になり、大学になり、ますますすばらしくなりました。今日ここにいらっしゃる先生方は、特に身近な方たちです。若い時からご一緒に、お酒を飲んだこともあります。教育は、お互いに信用することができなければ成り立ちません。人間と人間がぶつかるときの心、人間愛こそが、先生と生徒の関係です。私の教わった下八川圭祐先生からの教師の在り方を、皆さんに少しは伝えられたかな、と思っています。

二見： 下八川圭祐先生は、亡くなられる前年の昭和 54（1979）年、『東京声専音楽学校入学要項』に次のような言葉を残されています。

1. 人間性と教養を身につけた音楽家の育成
2. 個性の伸張とヒューマニティの高揚
3. 相愛の精神、人間と人間のふれあい、礼節を重んじる。

自然に培われた礼儀作法は、いつの日かステージにも現れ、演奏される曲は人々の心を強くうつものがあると深く信ずるからである。このような人間教育を基本に声楽の指導に当たっては、豊かな張りのある唱法技術であるベルカント発声法を私の責任指導において採用している。

星出先生のお話によれば、圭祐先生自身もベルカントを学んでいなかったけれども、美しい発声を追求めた結果がベルカントの発声に近かったということなのでしょう。

● 下八川先生の思い出

黒田： 私はフルート専攻でしたが、下八川先生に確か「声がよいから声楽家に移れ」、というようなことを言われたことを覚えています。私は笛吹きになりたかったのですが、当時は迷惑くらいにしか感じていませんでした（笑）。でも今思うと、確かに、いろいろ声楽の経験ができたことは、とてもよかったと思います。例えば《ナブッコ》を星出先生の指揮で新星日本交響楽団で歌わせていただいたこともあります。杉浦正一先生の指揮で《マタイ受難曲》にも合唱団員として参加することもできました。本当は、横目で見ていたあのオーケストラの中で吹きたかったのですが。その頃はまだ若かったですから、「笛を、笛を」という気持ちが強かったのです。今、当時の経験は、音楽を組み立てることや呼吸の問題などに役に立っていると思います。下八川先生は、学生に対してかなり厳しかったのです

が、音楽の情熱を感じました。尊敬しています。星出先生は僕たちの立場まで降りて来てくださり、仲間として熱く音楽を語り合えたことは幸せでした。うれしかったです。その後、新星オケでも使ってもらうこともできました。

的場： 私は、個人レッスンでは別の先生に師事していました。最初東京声専音楽学校に入学した時から藝大に入りたいと思っていて、そのことを下八川先生もわかっています。東京声専に住まわせてもらいながら勉強しました。昭和音楽短期大学では中村健先生に教えていただきました。下八川先生はたまに聴いてくださいました。ある時 11 教室で私が練習していると、学長室から先生がふらっと現れて「的場君、その声がよい声だ」と言ってくださったこともありました。自分の成長をみていただきました。

中村： 私も 3 回くらい直接見てもらったことがあります。ただ、私が入学して間もなく具合が悪くなられたのです。

田野崎： 私も、試験の前になると担当の先生に連れて行かれて、直接聴いていただきました。田舎育ちでベルカントなどあまり知らなかったですし、声がこもっていたので、「歯を出して」とか、「はっきり」とかよく言われました。2 年間の短期大学の中で 4 回試験があったので、大学の 4 年間で勉強したような気がします。2 年目にはアリアです。バリエーションなども勉強しました。

山館： 私の場合は、東京声専に入学する直前に、下八川先生が亡くなられたことを新聞で知りました。ですから直接教える受けてはいません。でもその後、奥田良三先生が全体の発声の授業を引き継いでなさっていた記憶があります。何人かをステージに呼んでやっていました。私も呼ばれたことがあります。

八尋： 私も個人レッスンは受けませんでしたが、発声法の授業で下八川先生のお教えを受けました。学生は全員手鏡を持参させられました。下八川先生が壇上でお手本を示されて、学生たちは手鏡を見ながら一緒にその口まねをしました。「ベルカント」という言葉はこの発声法の授業で学びました。言葉は学びましたが、実践的にはまだしっかり把握出来ていなかったように思います。一人一人指名されて発声させられるので、いつ自分の番が回ってくるのかドキドキしていました。もう少しで自分の番だという時に、先生が納得されない発声をした学生がいたりすると、とことんその学生の指導に時間を費やされて、時間切れになってしまったこともありました。信念の方でしたね。余談ですが、私が昭和で師事した中村健先生も以前、下八川先生にはとてもお世話になった、とおっしゃっていたことがあります。声専から藝大に進学なさったのですが、下八川先生のおかげだったというようなこともおっしゃっていたように覚えております。声専、音楽芸術学院、そして短期大学を設立なさった下八川学長から引き継がれて、現在は大学、大学院と、昭和音大ファミリーが増大してきておりますが、今更には下八川学長の多大な日本社会への文化の貢献を考えさせられます。

● 星出先生から受けた授業

星出： 私は、下八川先生のもとで発声を学びました。歌も好きでしたが、音楽を勉強するのなら指揮者になりたいと思うようになりました。下八川先生は、マンフレッド・グルリット先生を紹介してくださいましたが、実際に指揮者になりたいと言うと、「誘惑されたのではないか？せっかくよい声をしているのに。だめだ」と言われました。でも結局ヨーロッパで勉強することになった時には、「歌を忘れるな。歌のレッスンも受けなさい」と言われました。とてもそんな暇などありませんでしたが。音楽を全般的に、劇場で学ぶことは多かったです。帰国してから「歌を聞かせろ」とは言われませんでした。

中村： やはり星出先生は声楽の訓練をしていらしたのですね。学生の中で、星出先生の声はよく響くという評判でした。コールユーブンゲン 2 巻の授業では、よく歌ってくださいました。そこで学生は、こわい思いもしたのですが。

星出： 発声については、下八川先生のおかげです。今、二見先生には怒るときに手を上げてはいけないと言われていましたから、当時のことはしかられそうですね。でも、私はできないことに対しては怒りませんが、サボっているのは許せません。オーケストラの授業で弦の練習が多くなったりして、おまけに金管の吹く所が少なかったりしますと、こっそり週刊誌を開いたりしている学生がいたことがありました。「バカ者！」と怒鳴って本を取り上げ、手を上げたのです。学生たちは私に見つかるかどうか賭けをしていたのですね。でも、それほど怒られるとは思っていなかったようです。授業が終わってから理由を説明に数人で現れ、必死に謝って帰りました。卒業してからもその学生たちは度々学校に来てくれましたし、飲みにも行きました。40 年も経ちますが、年賀状が今でも来ます。教師としてはとても嬉しいことです。厳しさを教えることも教育だと思っています。決して手を上げることは良いことだとは思いませんが、必要に応じて今でもゴツンはやります（笑）。

八尋： 私が入学した当時、星出先生は帰国されて間もない頃だったように覚えております。ゴツンをなさるような厳しい方には見えませんでしたけれど・・・？

中村： 私たちの場合、先生が最初の授業でおっしゃったことは「僕の授業でお願いしたいことは、休まないこと、泣かないことです」でした。皆泣くのです。そしてだんだん来なくなります。楽譜でたたかれた人もいました。痛いとかではなく、緊張感が大変でした。

● オペラへの思いを受け継いで

星出： 基本的に、ここにいらっしゃる先生方が、下八川先生の時代に学生だった世代です。学生時代には「ベルカント」という言葉の内容はあまり良く分かっていなかったと思いますが、先生のおかげで少しずつ浸透していったように思います。時代としてその頃から、ベルカントとは何か考える人が増えたのです。先生方もそうでしょう。全員がベルカントを知らなければ、ということが浸透したのです。昭和音大の先生にはそういう先生しか採用しないと決められたので、自然にそのように先生が伝えているといえます。

二見： 声楽の非常勤の先生方にもベルカントの歴史について共通理解はあると思いますか？

全員： あります。オペラについては、イタリア歌劇団が来日した時などには、必ず学校で公開レッスンの機会を作ってくださいました。ある時は、イタリア留学から帰った卒業生に歌ってもらったこともありました。

的場： 恋愛については厳しかった下八川学長ですが、僕が結婚する時には報告すると喜んでくださいましたし、結婚式にも出てくださいました。つまり遊びはだめで、真剣なおつきあいならよいということです。その後東京声専音楽学校に遊びに行くと、棚から羊羹を出して、それを切ってお茶を入れてくださったこともあります。そんな時の話題で「短大でオペラ、オペラというけれども、短大でできるわけではないよね」と言ったりされました。教育として、体験させねばならないという考えがおありだったと思います。オペラを教えようと、田野崎先生などは、たしか 2 年目にして、《ルチア》などを歌うように言われたのではありませんか。学生にあわせた教育で、無理なことは言わないが、できるとみたら、鍛えるためにやらせたのです。

二見： 八尋先生は、アメリカから帰国して、本学の教育に違和感はありませんでしたか？

八尋： 違和感はまったくございません。アメリカではヨーロッパは勿論、世界単位で先生でも歌手でも、良い人材はどんどん呼び寄せているという事情もありますし、「ベルカント唱法」も浸透しております。いろいろなテクニックやメソッドも、あらゆる角度から研究・検証を継続して行きます。アメリカで初演されたオペラも多いですね。プッチーニの《西部の娘》などもそうです。昭和音大の声楽教育における認識の高さと実践力は、日本の音大の中でもトップレベルに位置していると誇れますし、実際に、世界でも通用するような素晴らしい人材が続々と養成されています。

● 今年の《ピーア・デ・トロメイ》

星出： 今年、大学院生のソリストを含め、出演者が若い人ばかりでした。不安もありましたが、結果はすばらしかった。男子学生も 1 年生から出演しました。彼らは何も知らない学生で、その分、感動していた様子でした。無垢で清純な人たちの作る音楽は説得力があります。圭祐先生から 3 代に亘る人たちでオペラが創られたのです。私の教え子に当たる指揮者、合唱指揮者、演出助手の堀岡佐知子さん、その教え子に当たる学生。出演者が全員昭和音大の卒業生と現役で公演できたのは初めてで、感慨深いものがあります。これこそが、下八川先生の求めていらしたものです。厚木に短大ができた時、先生は B ホールにわざわざお金をかけてオペラ・ピットを作られたのです。「ピットがないとオペラができない」と、執着されていました。今度のオペラが「うちの子だけでできましたよ」と言っ

てさしあげたら、どんなに喜ばれたか。あの夜は感動して、また1杯飲んでから寝ました。

木村：今年のオペラは本当にすばらしかったと思います。出演者が卒業生、在校生の若い人たちで、私はほとんどすべての練習を観ておりました。本番に向かって皆が「素晴らしいオペラを作り上げよう」とひとつの目標を目指して情熱にあふれていました。そして本番の日にそれがひとつとなったのです。オペラに携わった人の情熱がひとつになったのです。私はこの瞬間に参加できて本当に幸福でした。

二見：公演後に、関係の方々の懇親会が開かれました。その席で、指導者の皆さんはそれぞれ感激していらっしゃいました。下八川共祐理事長も、演出のマルコ・ガンディーニさん、堀岡さんも満足顔でした。マルコさんは情熱的な人で、できればまたやりたいとおっしゃっていました。また、今回の《ピーア》にいらしてくださったカリタス女子短期大学の学長先生は、中東の宗教と文化の専門家ですが、合唱を聴いて感動して帰られました。合唱指導の山館先生、あれがベルカントですか。

山館：そうです。まだ若い学生ですので、表情などオペラの場合に要求されることについてはまだ道の途中ですが、素直で若々しい響きというのは大事なことです。先生方のご理解があつてありがたく思います。本人たちも達成感を得てとてもよかったと思います。

田野崎：学内で男子学生が少ないわりに、ああこんなに大勢の男声合唱ができてよかったと思いました。1年生で実際に歌った学生たちは、「楽しかった、来年もまた」と言っていました。一方では「客席で見たかった」と言う学生もいました。

星出：オーケストラの世界では、先輩後輩の意識が強いもので、私が入っただけで挨拶する習慣ができあがっています。今回、初めての合唱参加者たちには、「おはようございます」を言うことから教えました。先輩には教えるように言いましたし、後輩にはそのうち声が出るようになると言い、実際そうになりました。下八川圭祐先生が教えた挨拶、礼儀が第一です。お礼をいうこと。これを先輩が後輩に教えることができるようになって、よい結果となりました。

的場：声楽コースのカリキュラムでは1、2年生は基本的な合唱を勉強することになっています。今回、中には最初から4年生と一緒に練習をしたかったという声もありました。皆で相談してよい方法を考えていかねばなりません。学生たちは大感激で、この経験は大きいのです。そのプラスとマイナスをどう考えるかが大問題です。個々の学生にもより、今年の1年生はレベルが高かったこともあります。

中村：合唱に入る前に、履修状況をチェックしました。専門学校と違って大学では単位制というシステムで、4年間の課程でやっていますから、4年生の科目を1年生が読み替えることができません。今回も、1年生から3年生までの学生には、単位はないのです。プログラムに名前は載りますが、成績はつきません。

二見：専門の先生方で、部会でも議論してほしいことですね。大学というシステムでどうしたらよいか。《ピーア》に出演した、ということは、今話題になっている「ポートフォリオ」に記録することはできます。積み重なれば、キャリアとして将来の実績になります。

● 今後の夢

星出：私は、二見学長に感動しています。失礼ですが、教育畑の二見先生が音楽大学の学長として、客観的に音楽の世界に入られながら総てのことをまとめていらっしゃる。しかし、時々ご注意いただくことなどは音楽の専門家では？と疑うほど音楽の真髓についていらっしゃると思うのです。音楽教育も我々が芸術を・・・等というよりきちっとした教育理念の中に立って指導していかねばならないという見本を見せていただいているようです。下八川圭祐学長の教えを受け継がれていらっしゃる二見学長には、我々をもっと導いていただかねばならないでしょうね。

オペラとは、本来「作品」という意味を持ちます。すなわち多くの人間が集まりひとつの作品を創ることを意味しますので、当然人間教育にも使えます。また、創り始めたら途中であきらめることはできません。合唱の学生、オーケストラの学生、スタッフの学生、アートマネジメントの学生、総ての学生に対し、我々は最後の1分まで完璧を望み指導するのです。テクニックひとつを身につけるためにも熱く語りたいし、我々は、あきらめずに学生に心を開いて語っていかねばならないと思っています。

的場：具体的に星出先生とお話したこともあることですが、学生時代に藤原オペラの公演に合唱団員として乗れたことがあります。オペラに出演できて、勉強できて、一流のソリストの声が聴けて、とても勉強になりました。今はなかなかできないことですが、昭和音大には藤原歌劇団とのつながりがありますから、そのような方向を探っていけたらと思います。藤原歌劇団にインターンシップとして行くことができればキャリア教育になるし、単位を出すことも考えては。大学はお金を使いますが、いかがでしょう。

星出：アイデアはとてもよいですが、当時、特に藝大などでは授業数が少なかったので学外でそのように活動することができたのでしょう。教育の現場と商業ベースの藤原歌劇団が一緒ではまずいと思いますが、将来的にはそのアイデアを利用すべきかもしれませんね。

中村：キャリア教育をいろいろ言われていますが、オペラも海外研修もとてもよい教育だと思います。机に座って勉強するより、人間的成長という視点からもよいことです。外に出るのが難しければ、1年生が参加できる舞台実習のような科目を単位化する方法も考えられないでしょうか。声楽の学生だけでなく参加した学生はどのコースでも履修できるものを、①から④まで置いておく、など。

田野崎：私たちも勉強しながら伝授しているのですから、自分の向上を考えて自分を育てる難しさも感じます。教えたものが伝わった時、優秀な学生のその後の生活まで面倒を見

てあげられたらよいなと思います。現在プレルーディオがありますが、本当によい学生には、卒業後少しお給料を出して、合唱で使ったり中学校を回ったりするなどの仕事を紹介し、音楽を職業するレールを敷いてあげることにはできないでしょうか。少しでも多く下八川圭祐先生の教えを受け継いだ声楽家を育てていけるのではないのでしょうか。プレルーディオを大いに活用してキャリア教育を実践していくというのも、ひとつの発想でしょう。

黒田：やはり、下八川先生の熱い思いと、私たちにそういうものをぶつけてくださった星出先生の熱い授業を受け継いで、熱く音楽を語っていきたいと思います。私も学生にどなっていることがあり、どなってから、あれ、言われたことと同じことを言っているということもあります。つい、学生に対してはがゆくなるのですが、星出先生もそういう気持ちだったのだと思います。熱い思いがないと音楽はできません。歌とは畑が違いますが、今年のオペラは全体的によかったし、感動しました。ただ、オーケストラに目を向けると、妥協はしたくない、よりレベルの高いものを求めながらいきたい、と熱い思いをもちながら聴いていました。

山館：先ほどの場先生がおっしゃっていたように、年代的に近いこともあって私の頃も、いわゆるステージが外にあっていろいろな経験ができた時代でした。星出先生がいらっしやらなかったら私はここにいないでしょう。先生から「大丈夫だよ」と言ってもらえて、経験ができたのです。東京では、まわりは知らない人ばかりで刺激も多かったです。日本のオペラ界で、しかも第一線で活躍している方たちと一緒にできたことが糧になりました。星出先生には違った意味で泣かされました。ここまで思ってくださいなのか、と感動するのです。仲間だと思ってくださいとのことですが、私はいくつになっても不肖の弟子で、先生はいくつになっても先生です。死ぬまで師匠は星出豊先生で、先生から綿々と受け継がれている「熱い思い」は私も受け継いでいると自負しています。その熱い思い、人間を愛すること、芸術を愛することを、改めて今日心に留めてこれからもやっていこうと思います。

木村：大久保の声専時代から考えますと、着実に夢がかなっているように思います。その当時はまさか現在のこのすばらしい大学にまで発展していくとは想像できませんでした。東成学園に関係していらっしやるすべての方のご努力のお陰だと思います。学生も年々とすばらしい才能を持っている学生が増え、我々指導者も各々の専門分野で今までより勉強をしていかなければならないし、今からでも可能な限り自分を向上させていくことが必要だと思います。

八尋：下八川先生の教育精神を受けた卒業生は現在までに1万5千人に達しております。卒業生が集うと、懐かしい思い出話に花を咲かせ、現在の大学の姿に「こんなに立派になって！」と、非常に喜んでいます。36年間にわたって同侪会(昭和音大卒業生組織)の会長をお務めになられた黒田先生から引き継ぎを受けた新会長としては、学生たちにますます人間力を培ってもらう事を願います。人生のアップダウンに耐え得る強い精神力と何事にも感謝出来る素直な心をもって、昭和音大で勉強出来て良かった、と思って卒業してい

ってくれたら嬉しいです。現在の日本の現状はとても厳しく、暮らしにくくなっておりますので尚更です。そのような卒業生をサポートするためにも、頼れる同侪会の位置づけを堅固にしたいものです。アメリカの多くの大学の卒業生の組織は、運営資金調達、就職情報収集、レクリエーション企画などなど、活発に活動していますが、何と言っても、母校のために有益な寄付金制度も確立しているところが凄いです。私どもも昭和音大ファミリーの一員として卒業生の絆を広げ、母校をサポートして行けるようになりたい、と考えます。地元に戻れば先輩がいてネットワークがある、そして就職情報もスムーズに交換出来ればいいですね。昭和音大は現在大学関係者だけでオペラやバレエ、その他のコンサートの企画作成も可能な、素晴らしい教育環境を整えています。このような母校の発展に卒業生も在學生も感謝してほしいです。

星出： この若い人たちのエネルギーが、これからの昭和音大を引っばってくれることを確信します。伝統はまだこれからだと思います。何十年ものエネルギーを伝統に換えながら、すばらしい大学にしていってほしいと思います。